

あけましておめでとうございます



下田市議会議長
滝内 久生



下田市長
松本 正一郎

新年あけましておめでとうございます。市民の皆様におかれましては、輝かしい令和5年の新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

また、平素より議会運営に對し温かいご指導、ご理解を賜り厚く御礼申し上げます。

昨年は新型コロナウイルス感染症が拡大、沈静化を繰り返し、次から次へと変異し衰えることのない状況が続き、国内の経済や日常生活に様々な影響を及ぼし暗い影を落とした一年でありました。観光業が主幹産業である下田市にとって新型コロナウイルスの蔓延は地域経済や市民生活に計り知れない影響を及ぼし、鬱々とした状況は一向に改善されませんでした。

下田市を取り巻く環境は大変厳しく、解決しなければならぬ課題が山積しております。人口減少・少子化の加速、感染症による安全・安心への不安を始め、様々な課題の解決に向け、市民、行政、議会が一体となり、立ち向かっていかなければなりません。「新庁舎建設事業」「広域こみ処理事業」などの課題につきま

あけましておめでとうございます。謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

さて、今年2023年は、あの関東大震災からちょうど100年目となります。

1923年（大正12年）9月1日、午前11時58分。家々でお昼ごはんの用意をしている時、マグニチュード7.9、最大震度6（当時6が最大）の大地震が関東地方を中心に発生し、死者行方不明者は10万人を超えたと言われています。被害は広い範囲に及びました。特に人口密集地を抱える東京では、火災も大規模だったことから多くのまちが焼野原となつてしまったのです。

その焦土と化した東京を一刻も早く復興するため、政府は翌9月2日に一人の男を内務大臣に任命しました。9月27日には帝都復興院が設立され、その総裁も内務大臣が兼務することとなりました。

彼の名は後藤新平。半年前まで東京市長を務めた人です。復興院には数多くの技術者や官僚が集められ、世界に冠たる都市東京を創るという高い理想を掲げて放射環状型の道路網や公園緑地計画などすばらしい都市計画案が作成さ

しては幅広い正確な情報・知識を基に市民の代表としての責務を果たして参ります。

地域経済や観光振興に大きく寄与することが期待されている伊豆縦貫自動車道の整備が着々と進められています。新年早々には下田市にとって初めての高速自動車道が供用開始されます。河津IC（仮称）～逆川IC（仮称）区間の完成は大幅な時間短縮が図られることから、観光地下田にとって大きな朗報であります。さらに、天城峠を越える区間（約20km）につきましては令和5年度中に事業化されると聞き及んでおります。

伊豆縦貫自動車道全線開通の効果は多方面に及び、地域経済や市民の生活環境にとって一大転機となるでしょう。

行政、議会、諸団体の皆様による陳情・要望活動の賜と感謝申し上げます。

市議会では「女性・若者の議会参画」や「議会運営のICT化」など様々な取組を進め、市民に開かれた議会を目指して参ります。

結びに、市民の皆様のご健勝、ご多幸を祈念申し上げます。今年のご挨拶といたします。

れました。しかし、その壮大な計画は予算も膨大であることから「後藤の大風呂敷」と揶揄され、大幅に縮小されてしまいます。それでも当時つくれた幹線道路や公園は、その後も東京の重要なインフラとなつて現在の首都東京を支えています。

下田市でも今、未来に向け、あるべきまちの姿、いわゆるグランドデザインを描いているところですが、目標とする年次は2050年、あと30年先です。その頃には、伊豆半島を貫く骨格軸伊豆縦貫自動車道が全線開通しているだろうという予想とソサエティ5.0というデジタル化の目標年次が2050年であること、さらには、下田に黒船が来航して200周年（正確には2053年）の大きな節目となることなどからです。後藤の大風呂敷に比すべくもありませんが、下田市でも未来を見通した大計を描き、次の世代につなげる。それが今を生きる私たちの責務だと思っております。これからも皆様と一緒にその大きな夢に向かって一つ一つ着実に実行していきたいと思えます。

今年もよい年になりますようお祈りして新年のご挨拶とさせていただきます。